



9月号

ひだまり

今月のエッセー

きのこ狩り

リンリンと鈴虫の声が聞こえ始め、秋の気配が近づいてまいりました。

私はここ数年、この季節ならではの楽しみがあります。それは知人と行く「きのこ狩り」です。私一人では行けません。クマが出るかもしれないし、何よりまだ毒きのこを判別できないからです。

そう考えると中々危険な行楽ですが、私だけでなく、きのこ狩りの魅力に多くの人が夢中になります。

その魅力について知人は、「広い山の中で宝探しをするようなものだ」とよく言います。まさにその通りで、何も考えずに山を歩いても簡単には見つかりません。転がり落ちてしまうような急斜面を

歩いたり、枯れ枝に紛れて蛇が潜んでいたりするので油断は禁物です。

落ち葉の中でパツと目を引くきのこを見つけ、あった！と喜ぶのはまだ三流です。そのような目立つきのこは見るからにお腹を壊しそうな真っ赤で毒々しい色をしています。食べたら危険で、命の保証はありません。中には食べられるきのこもソックリな毒きのこもあり、あった！と見つけても毒でした、なんてことはよくあります。

それでもめげずに「あった！」「これだつ！」と確信し、きのこを手にした喜びはまさに山の中に隠された宝石を手にした気分です。しかも発見する喜びだけに留まらず、更においしく食べることもできるのです。私のおすすめはきのこ煮込みうどん。きのこ醤油の香りがふわつと食欲を誘い、口にするとシャキッと気持ちのよい歯ごたえ、そして程よい苦みが堪りません。

「おいしい！ありがとう！」と山に感謝し、自然に生かされている小さな自分を感しながらもう一口、と箸が勝手に進みます。

◆丹羽隆浩

活動紹介

演劇実習 「みんなのりんご」

私たちは曹洞宗の教えを身近に感じてもらえるように様々な活動を行なっています。その一環として、毎年9月の上旬に保育園や幼稚園で行う演劇実習があります。

脚本から衣装、照明による演出に至るまで全て自分たちで作ります。今年の劇のタイトルは「みんなのりんご」。この演劇で伝えたいことは「慈悲」です。劇中では、「僕が先にみつけたりんご！」「りんごの数が足りない！」ということまでひと悶着。しかし、そこからみんなで悩み、行動する様子が描かれています。



劇の様子
「いただきまーす！」

この劇には子ども達に、お友達を思いやる優しい心を育み、日々仲良く、健やかに過ごしてほしいという願いを込めました。

劇が終わった後は、園児たちとのふれあいの時間です。一緒にご飯を食べた後は、お絵描きや追いかっこでたくさん遊びました。劇中でネズミやライオン、キツネなどの役を演じたメンバーは人気！あつちにこつちに引つ張りだこでした。

毎年、子どもたちに劇を通して、曹洞宗の教えを伝えることの難しさを感じています。今年も「役を演じること」と「教えを子ども達に分かりやすく表現すること」に苦悩しました。

いざ劇を終え、子ども達の教室に行くと、大きな声で「たのしかったあ〜！」の一言にメンバー全員が笑顔になります。

◆菊地志門

編集後記

今月の上旬、台風が過ぎ去ってから数日後の夜、空がパツパツと明るく光りました。「雷かな？」と身構えたのですが、音はしません。調べてみると、これは「稲妻」でした。地上に落ちてくるのが雷で、雲の中で発火し、地上には落ちてこないものが稲妻、という違いがあるそうです。稲妻の語源も調べてみました。稲妻が光るのは秋ごろで、秋と言えば稲が実る季節。この時期に稲妻があると豊作になるといふ云われがあるそうです。そのため稲を実らせるつがい、妻と考えられ、「稲妻」となりました。

学問の秋などとも言われるこれからの季節。日常にある素朴なものに関心を向け、自分の知識を耕していきたいと思えます。

◆久松彰彦

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗事務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



二年度
秦 慧洲

かけがえのない月

お月見の季節になりました。古来より多くの人々がお団子をお供えし、月の美しさを愛でました。道元禪師も月を愛した一人で、多くの著述で月について述べられています。今回はその中の一つのエピソードをご紹介しますと思います。

道元禪師は亡くなる直前、療養のため京都にいらつしやいました。その日は旧暦の八月十五日で、まさに中秋でした。道元禪師は中秋の名月を見て、次の和歌を残しています。

また見んと思ひしときの秋だにも
今宵の月にねられやはする

(また見られると思っていた秋の月でさえ美しい。まして今夜の月を見ずに寝ていられようか、いやできない)

毎年この時期に出会える、あたりまえの月。しかし、自身の余命が幾ばくもないことをおそらく理解していた道元禪師にとって、目の前に現われた満月が生涯最後の月であり、何にも代えがたい月に見えたことと思われまふ。

月自体は何も変わっていません。そこでは見る側の心境の変化が起きているのです。あたりまえがあたりまえでなくなったことで気づいた景色。それは道元禪師にとっても一緒だったのではないのでしょうか。

私も似たような心境の変化を永平寺の修行時代に二回感じたことがあります。一度目は修行に行く日でした。東京から福井に向かう電車に乗っていた私は、窓から生まれ育った地元の景色を眺めていました。既に覚悟を決めてはいたものの、やはり永平寺に行くことは嫌で、「ここに戻れるのはいつになるのだろうか」などと考えていました。あたりまえと思

っていた日常が消え、永平寺という非常に飛び込むと決めた時から、目の前の街が愛おしく思えたのです。

二度目は修行から戻る日でした。修行仲間に見送られてお寺の門を出た後、ふと後ろにある永平寺を振り返りました。すると様々な修行の思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡りました。不思議なことに、修行前はあんなに嫌だった永平寺から離れることに寂しさを覚えたのです。心の中で感謝の気持ちを抱きながら、私は永平寺に別れを告げました。

人の心は勝手なもので、普段はあたりまえと思っている日常に対して何も思わないのに、その時々的心境によって目の前の見え方が大きく変わります。そして、人の感情や思いがあるからこそ、あたりまえと想っていた景色がかけがえのないものになるといえます。そのことを私たちは忘れがちな気がいたします。

もし晴れるのであれば、少し夜更かししながら空を見上げてみるのもよいかもしれません。私も今この瞬間にしか現れない月をみて、その美しさに素直に感動したいと思えます。

やまうちだんじょう 山内弾正 こばなし の小噺



スイレンの常花

蓮の花飾り



「禅の集い」で坐禅をする子どもたち

私の実家では、毎年八月の下旬に「禅の集い」をおこなっています。小学校低学年から高学年の子ども達を集めて、朝から夕方までみんなで一緒に勉強したり坐禅をするイベントです。参加する子どもたちの半分くらいは境内にある保育園の卒園生で、久しぶりに入った本堂の中を嬉しそうに駆け回るのがお決まりの光景になっています。

子ども達の笑顔を見るとこちらも嬉しくなるのですが、やはり、「せっかくお寺にいるのだから、友達と走り回るよりも本堂の様子をもっと見てもらいたいなあ」という思いが以前よりありました。そこで子ども達に、「本堂の中に〇〇はいくつあるかな?」というクイズを出し、堂内を探検するように促すことにしました。

子ども達は喜んで、お寺の中にある様々なものを見つけられます。同じ格好の仏様とか、動物の像がたくさんあるとか。そうして、次第に私が気づけなかったことまで報告してくれるようになりました。その中の一つが「スイレン」と「ハス」と「蓮華」の違いです。スイレンもハスも、どちらも水中に根を張り、美しい花を咲かせる植物としてよく知られています。水底の泥の中から芽を出し、華やかな花弁を開かせる様子は、清浄で気品のあるものの象徴として様々な文化の中で重宝されました。仏教においては、智慧や慈悲をあらわすモチーフとして数多くの仏教美術や堂内の装飾に取り入れられています。

実は、仏教ではこの二つを「蓮華」という総称で呼んでいます。よくよく見れば花弁の違いは明白なのですが、私たちはどちらも「蓮華」と呼んで区別はしていません。その理由は調べてもはっきりとわかりませんでした。おそらくは仏典を漢語に翻訳する際に生じた食い違いなのではないかと思えます。

ですから、子ども達に指摘されるまで、私はどちらも蓮華と呼んで気にも留めることはありませんでした。しかし、「スイレンみつけたよ!」と声をかけられたその時から、今まで見慣れた本堂の中でも新たな発見があることに気づかされたのです。皆さんもお寺へのお参りの際に、ぜひ探してみてください。きっと、どこかに隠れているはず。それを見つけたら、本堂の中にある様々な装飾がより鮮明に見えてくることでしょう。芸術の秋、お寺の中に咲く蓮華の花を探してみたいかがでしょうか。